

## ヘーゲルにおける

### 「現実性」の概念について

田 路 慧

ヘーゲルは『法の哲学』において、「存在するものを把握することが哲学の課題である。ただし存在するものとは理性であるから。」と述べ、また「哲学は理性的なものの探究であるから、まさにそれ故に現に在るもの、現実的なものの概念的把握であって、神がそのありかを知るとされる彼岸的なものの定立ではない。」と述べているが、このようにヘーゲルは哲学の課題を「存在するもの、現実的なものの概念的把握である。」と規定しているのである。この現実的なものの概念的把握ということをさらに具体的に言えば、それは「自覚的精神としての理性」すなわち概念的に把握する認識作用としての理性と、「現存する現実性としての理性」すなわち倫理的ならびに自然的現実の實體の本質としての理性との自覚的統一、換言すれば形式と内容との、あるいは思考と存在との否定媒介的統一、この統一が理念ないし真理であるが、この統一の完成すなわち真理の把握が、ヘーゲルの言う哲学の究極的な任務なのである。したがって哲学の場はこの眼前の自然的あるいは歴史的社会的現実であって、この現実以外にないものである。ヘーゲルはこのことを「ここがロドスだ。ここで跳べ。」という比喩をもって表わしている。またヘーゲルはある思想が正しいか、まちがっているかを見分ける試金石は、その思想が現実と合致するかどうか、現実の経験による検証に耐えうるかどうかであると述べ

ている。

ではこの現実の概念的把握という哲学の使命を遂行せしめる原動力となるものは何であろうか。ヘーゲルは次のように述べている。

「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である。すべてとらわれざる意識すなわち哲学のごときはこの信念に立つものであり、哲学は精神的宇宙を考察するにも、自然的宇宙を考察するにも、ともにこの信念から出発する。」

かくて「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である。」という信念こそ、ヘーゲル哲学の出発点であるとともに推進力でもあり、また到達点であって、ヘーゲル哲学を一貫する主題なのである。

ところでこの命題はヘーゲル哲学へのさまざまな誤解を生み、現実は無原則に妥協するもの、無批判に現実を美化するものという非難を呼び起こしたのである。これらの誤解や非難に対して、ヘーゲルは『エンチクロペディ』において次のように答えている。「この簡単な命題は多くの人々に驚きと敵意を起こさせた。……：日常の生活ではあらゆる気まぐれ、誤謬、悪というようなもの、またどんなにみすばらしい一時的な存在でも手当り次第に現実と呼ばれているからである。しかしわれわれは普通の感じから言っても、すでに偶然的な存在は真の意味における現実の名に値しないことを感じている。私が現実という言葉を使っているとすれば人々はそれについてとやかく言うまえに、私がどんな意味にそれを用いているか考えてみるべきだ。」

そこでヘーゲルの言う Wirklichkeit (現実ないし現実性) という概念のもつ意味を明らかにすることによって、この命題の真の意義を考えてみたいと思う。

ヘーゲルは『エンチクロペディ』において現実性の概念を次のように定義している。

「現実性とは本質と現存との統一、あるいは内的なものとの外的なものとの直接的になった統一である。」<sup>⑧</sup>

すなわち本質とは自己否定し現象として発現して、その現象においてのみ自己を自己自身として開示するものであるが、この本質から出現する直接性すなわち可能的存在が現存 *Existenz* であり、この現存が規定され形態化される時現象となるのである。現象は本質から現われ出たもの、外的な措定された存在、本質の自己否定として非本質的な世界、すなわち影の世界という意味とともに、本質そのものの現われ、本質の現象としての自己完成という二重の意味をもっている。このような本質と現象との外面性における直接的な統一、すなわち本質と現象との区別された統一、ないし内面と外面との否定的統一が「現実性」なのである。「形態のない本質」と「支えのない現象」はこの現実性においてその真理をもつのである。したがって現実性としての現実的なものは「その発現のうちにあるかぎりにおいて本質的なもののみならず、直接的な外的現存のうちにあるかぎりにおいてのみ本質的なもの」なのである。

かくて現実性とは本質の自己内反省すなわち本質が現象のうちへと入りこんで自己を把握するとともに内なる自己を外へと開示し、自己を発現してゆく過程全体を意味するのである。すなわち絶対的自己否定者としての本質が自己を否定して直接的な現存として自己を現わし、自己を規定し形態化して現象として発現し、その現象の中において自己を現実として実現し、自己を自己自身とのみ結合させ、さらにその自己なる現象を非本質的なものとして否定してゆく運動、すなわ

ち内なるものから外なるものへ、外なるものから内なるものへの否定媒介的な絶対的關係が現実性なのである。そしてこのように活動そのものであり、作用するものであり、自己を開示し、現象となり現象の中において自己自身であり、さらに現象の中においてのみ自己を自己自身と区別し、自己を発展させるのが「現実的なもの」なのである。また現象は現実性において本質の自己内反省の運動の産物であると同時に本質の自己内反省運動の出発点なのである。したがってわれわれの意識は現実を現象の中にもつのである。換言すれば真理はまさにこの眼前の現象の中にこそ存在するのである。

かくて現実性の概念からみると、本質すなわち理性的なものはまさに現実的であり、現実的なものはまさに理性的ならざるをえないのである。

## 三

さてこのような本質の自己媒介的發展運動すなわち本質と現象との否定媒介的統一運動の絶対的な契機が、「人間の活動」なかに自由意志の働きのなみである。ヘーゲルは「自由意志はあるがままの事物を即而对自的なものとは見なさない観念論である。」と述べているが、自由な人間は現実を絶対的なものとして受け入れ、それに服従することをいさぎよしとしないのであり、与えられた現実を自由意志によって理性的なものへと形成せんと意志するものなのである。

ところで本質はまずそのものとしては単なる可能性であって、あるかもしれないかもしれない偶然性であるが、しかしそれは自己を自己自身の内から規定するものとしては必然性である。この必然性としての内的本質に対して、本質の外的現存である現象は内的本質が発現するための条件に転化する。条件は現象としての自己を止揚して他のものになるという定めをもっているものであるが、この現象を条

件として止揚し、本質を発現せしめるものが活動性である。この活動性は条件自身の自己止揚すなわち本質の自己実現の働きであると同時に、諸条件の内にある事柄を取り出し、条件の現存を止揚して事柄に現存を与え、さらに現存する事柄を条件へと止揚する働きでもある。そしてこの活動性の主体がまさに「人間」なのである。<sup>⑧</sup>

かくして現実的なものの運動は条件と事柄と活動性という三つのモメント、換言すれば手段と対象と人間という三つのモメントによって発展していくのである。この現実的なものの運動の内的必然的關係が、自己自身を媒介する実体の關係であり、それは絶対的必然性であると同時に自由そのものなのである。このように「自己を自己から反撥し、さまざまな独立物となりながらもこの反撥のうちで自己同一的であり、あくまでも自己のもとにとどまり、自己とのみ交替運動をする自立性」<sup>⑨</sup>が概念そのもの、ないし理念であり、この理念こそ最も現実的なものであり、現実性そのものなのである。

かくてヘーゲルは『歴史哲学』において世界の出来事はこの理念の自己展開の運動であり、この運動のモメントが人間であると規定するのである。理念ないし世界精神の目的も自由なる人間の情熱と行動なしには実現されないのである。

#### 四

このように理念すなわち現実的なものの運動の基本的なモメントが活動性すなわち人間であった。したがって理念の運動、理性的なもの、の現実化は人間の自由な活動なしには成り立たないのである。それゆえ理性的なものはそのまま無媒介に現実となるのではなく、また現実的なものもそのまま無媒介に理性的であるのではなくて、いずれも人間の活動によってはじめて現実的となりまた理性的となるのである。かくて「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的であ

る。」という命題においてヘーゲルが意図しているところは、まさに理性による現実の支配、思想による現実の変革である。理性の基準に合致しない現実とは真の現実ではなく、現実が理性によって形成されなにかぎり真の現実とはなりえないのである。もし現実が理性の基準に合致しないならば、それを合致するように合理的に変革しなければならない。そしてこの変革の活動が理性的なものの本質なのである。まさにフランス革命こそ人間が自己の理性によって現実を支配しようとした最初の試みであったのである。ヘーゲルは『歴史哲学』において次のように述べている。

「人間はここに初めて思想が精神的現実界を支配すべきであるということを認識する段階にまで到達したのである。したがってこれは輝かしいあけぼのであった。」<sup>⑩</sup>

ヘーゲルによればフランス革命は思想あるいは理性が現実を支配すべきであるという宣言であったのである。

#### 五

かくてわれわれは哲学において現実を概念的に把握し、真理を獲得せんと志すならば、まず自己を現実の運動の中に投げ込み、現実の運動の一モメントとして位置づけることによって、現実を自己のものとなし、その現実を理性的に変革しなければならない。ヘーゲルは「対象の真の姿が意識されるのはただ変化を介してのみである。」<sup>⑪</sup>と述べ、また「事物の内なる真なるものを知るには単なる注意だけでは不十分であって、直接的に存在するものを變形するところのわれわれの主観的な働きが必要である。」<sup>⑫</sup>と述べているが、このように現実の運動の中に飛び込み、現実の一モメントとしてその自己内反省的自己形成の運動に参加し、現実を理性的に形成するときはじめてわれわれは現実を概念的に把握することができるのである。このことをヘーゲルは「世

界の思想としての哲学は、現実がその形成過程を完了し、自らを完成し終った時初めて現われる。」と表現している。

このようにヘーゲルは哲学の場が、今、このこの現実以外にないことを強調することによって、哲学が現実を飛び越えた抽象的な観念論や、現実を忘れた未来論や予言、あるいは主観的な心情論や勝手な空想に墮落することを戒めているのである。

## 六

かくてヘーゲルも言っているように「もともと個人は時代の子」<sup>①</sup>であり、哲学も「思想のうちに把握されたその時代」<sup>②</sup>であって、哲学が時代や、その現実を飛び越えようなどということは思うも愚かなことなのである。それゆえ哲学を志すものは眼前の現実がどんなに厭わしく不快なものであっても、現実から眼をそむけ、それから逃避することなく、現実を自己の存立の基盤として引き受け、いさぎよくその中に飛び込み、この現実を自己の十字架として背負い、現実の理性的な形成にその一モメントとして加わらねばならないのである。ヘーゲルは『法の哲学』において次のように述べている。

「ここにバラが、ここで踊れ。理性を現在の十字架におけるバラとして認識し、もって現在を喜ぶこと、この理性的洞察こそ、概念をもって把握せんとし、実体的なものの中に主体的自由を保持しようとするとともに、その主体的自由のありかを特殊なもの偶然的なものの中にでなく、即而对自的に存在するものの中に置こうとする内的要求のひとつが生じた人々に哲学が与えるところの現実との和解である。それはこの世では万事悪しきことはかりか、せいぜい忍べる状態にすぎず、全くよりよきことなど望むべくもなく、ただ耐え忍んで現実と事なきを保つべきだとする冷たい絶望やあきらめではなく、もっと暖い現実との平和である。」<sup>③</sup>

このようにヘーゲル哲学の主題は理性（思想）と現実との統一、現実との和解であるが、それはもちろん無批判な現実肯定ではなく、あくまで否定媒介的な和解であり、否定され止揚されるべきものとしての現実の肯定、理性的に形成されるべきものとしての現実の肯定である。このヘーゲル哲学の主題を端的に表わすのが「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である。」という命題なのである。

以上みてきたようにこの命題は認識の命題であるとともに実践の命題でもあるということができよう。もともとヘーゲルは『歴史哲学』において、「哲学はただ世界史の中に反映する理念の光輝だけを問題とすべきである。哲学は現実世界の中の直接的な生の情熱の動きから一歩退いて、それを考察するものである。哲学の関心は、自分を実現する理念の展開過程、それまた自由の意識という形でのみ現われるところの自由の理念の展開過程を認識するにある。」と述べ、明らかに認識の立場に立っているのであるが、われわれとしてはこの命題を実践の立場に立って解釈し発展させていくことによって、ヘーゲル哲学を現代に生きたものとなすことができるのではなからうか。

註 ① Hegel Werke(Lasson) Bd. V S. 15 ② ibid. S. 14

③ ④ ibid. S. 16 ⑤ ibid. S. 15 ⑥ ibid. S. 14

⑦ Hegel Werke (Suhrkamp Verlag) Bd. 8 S. 49-50

⑧ ⑨ ibid. S. 279 ⑩ Hegel Werke (Lasson) Bd. V S. 298

⑪ Vgl. Hegel Werke (Suhrkamp) Bd. 8 S. 293 ⑫ ibid. S. 303

⑬ Hegel Werke (Suhrkamp) Bd. 12 S. 529 ⑭ Bd. 8 S. 78

⑮ ibid. S. 78-79 ⑯ Hegel Werke (Lasson) Bd. V S. 17

⑰ ibid. S. 15 ⑱ ibid. S. 16 ⑲ Hegel Werke (Suhrkamp) Bd. 12 S. 540